いのちと地域を守る

震災後の対応と地域の歩み振り返る

にぎわい再生へ一歩ずつ

あぶくま町内会副会長・宍戸定男さん

震災発生当日は自宅にいました。町内会の防災担当役員だったため、揺れの後すぐに、避難所だった荒浜小に向かいました。しばらくして、妻が高齢の両親を連れて小学校に来ました。津波を知らせる防災無線は聞こえませんでした。

津波が校庭襲う

学校には防災用品はほとんどありませんでした。体育館に敷物を広げ、避難した住民たちを座らせました。校庭には、児童を迎えにきた親の車が次々やって来ました。校長先生はここは私が守ります。帰ってください」と言って児童を引き渡しました。結果的に犠牲になった児童はいませんでした。良い判断だったと思います。

消防車が校庭に入ってきて、津波の襲来を告げました。私は品親を背負って、校舎の階段を駆け上がりました。3階に着いた途端、すごい勢いで津波が校庭に入ってきました。乗用車や消防車は全て流されました。

窓からは、土手に人がいるのが見えました。みんなで一斉げろ」と叫びましたが、声は届きませんでした。

高齢の両親伴う

翌日、避難所から両親を連れ出し、宮城県柴田町に車で送り届けました。自宅は津波で1階が被害を受けたため、半年間、親戚の家や避難所、仮設住宅に身を寄せました。

仮設住宅では、両親と眠れないようでした。急いで自宅に戻る準備に取館。妻と4人で暮らしました。高齢の両親には仮設住宅に残した両親を自宅に呼び戻したのは昨年の4月です。

再建した理容室は、宍戸さんの妻八重子さん（66）が切り盛りする

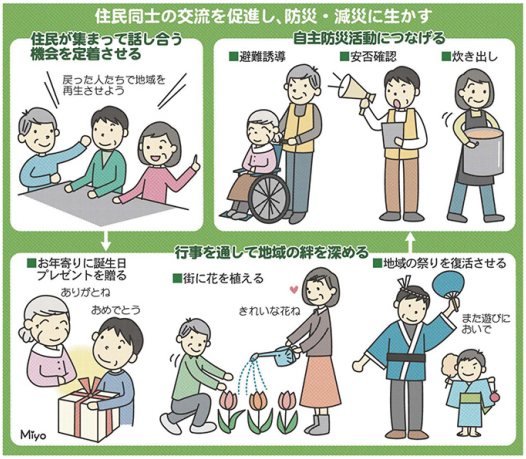
暮らしはきついものです。狭いし、夜もあまり眠れないようでした。急親を自宅に呼び戻したのは昨年の4月です。

私たちが戻った当初は、近所に誰も住んでいませんでしたが、少しずつ住民が戻ってきました。やはり人がいないと、地域が活気づきません。やる気のある人が集まり、焦らず、時間をかけて、地域をつくり直せばいいと思います。

店の外に明かり

妻が営む理容室も営業を再開しましたが、地元にいたお得意さんはほとんど、内陸部の仮設住宅に住んでいます。それでも店で髪を切りたいと言ってくれます。お年寄りが多いので、妻が車で送り迎えをしています。

震災以降、冬は店の外にイルミネーションを付けるようにしました。夜になって辺りが真っ暗だと不安ですから。明かりを見た人は、ホッとするそうです。



住民同士 問題共有を

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

津波被災地の防災・減災対策は、地域の再生が欠かせない。現地再建する世帯が震災前の1割程度にとどまる中、会活動を残しつつ、新しい地域再生の課題を探る。

2004年の新潟県中越地震でも被災後、住民が分散した地域があった。だが、「このままだと地元がだめになる」と、やる気のある人たちが集まった。倉庫をプラスの方向に働き、地域の活性化につながった。

高齢者が多く、住民が大幅に減った荒浜や、最初から住掛けで何かやるのは大変だ。小さなイベントを積み重ね、触れ合う楽しさを感じてもらえれば、少しずつ参加者は増えていく。

以前の祭りを復活させたり、みんなで花を植えたりしてもいい。誕生日を迎えた高齢者にプレゼントを贈って、お祝いする地域もある。

地域再生には、住民が問題点を共有し解決策を模索する手助を踏むことが重要だ。皆で集まって話し合う機会を定着させ、自主防災活動まで結びつけてほしい。

■むすび塾に参加して

【参加して】戻った住民同士が顔を合わせる機会を増やすと、親しみが増し、いさという時の助け合いにつながると思った。会合などの機会を積極的につくっていきたい。

＝あぶくま町内会長・渡部幸逸さん（65）

【参加して】日中、自宅に残っているのは高齢の親だけ。万が一を考えると不安だ。山元町の実地さが言うように、近所にいる人に気に掛けてもらい、連れて避難してもらえたら助かる。

＝パート従業員・佐藤由美子さん（52）

【震災時の経験】避難のため、孫に車に乗るよう言われたが、最初は「津波など来るはずがない」と言って断った。押し問答を繰り返し、最後には孫の嫁に諭されて車に乗って避難した。おかげで助かった。

＝無職・八木新六さん（87）

【震災後の不安】震災時、家族全員の状況をつかむまで3、4日かかった。万が一のことが再び起きた場合、家族との連絡をどのように取ればいいのか心配だ。

＝公務員・佐々木利久さん（59）

【震災後の不安】震災の3カ月後に荒浜の自宅に戻ったが、また津波が来るような気がして不安になる。孫の世代まで住んで本当に大丈夫かと悩み、いまだに移転を迷っている。

＝農業・斎藤勇紀さん（62）

宮城　亘理町「あぶくま町内会」

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の防災・減災のページ「むすび塾」は、6、8日に南米チリで実施したワークショップを特集します。